

受講番号 18075 学校名 佐喜浜中学校 氏名 白石 佳代

研究の背景

研究対象(学年、クラス等) 3年 生徒数 22 名
科目名 3年 単位数(授業時数) 3 時間 使用教科書名 Sunshine English Course 3 (開隆堂)

クラスの様子・特徴

全体的に授業はまじめに取り組めるクラスである。男女の仲が良く、クラスのムードメーカー役となる生徒もいて、時々明るくにぎやかな雰囲気になることもある。また、個々の活動になると英語を使って話すことに興味を示す生徒が多い。

問題の確定

「英語で会話ができるようになりたい」と望んでいる生徒が多いので、「話すこと」に焦点をあてた研究としたい。

予備調査

A 授業の観察

ペアや小グループなど、個々の活動では、明るい雰囲気の中で積極的に英語を使って話しかけたり、英語を使おうとする傾向が見られる。また音読練習などもよく協力してできる。しかし、一斉になるとその雰囲気が続かず、静かで消極的なことが多い。

B 生徒による授業評価

アンケートの結果、英語を学習する上で、単語の覚え方や英語の語順、英訳など文法的なことに難しさを感じている生徒が多かった。また、多くの生徒が、「英語で会話ができるようになりたい」と望んでいる。

C 学力データ

CRTの結果より(5月実施 全国100)
聞くこと(99) 話すこと(95)
読むこと(104) 書くこと(98)
「話すこと」が他の領域に比べると少し低かった。

リサーチ・クエスチョン

身近なことについて英語で受け答えをしたり、会話を続けたりすることができるようにするにはどうすればよいか。

仮説・実践・検証

仮説1

疑似場面ではなく、実際の場面で適切な表現を使うことによって、場面や話し相手にふさわしい表現が身につくのではないか。

実践1

あいさつ(始業時、終業時、週末前)、プリント配布時、ワーク作業時、生徒がくしゃみをした時、授業中トイレに行かせてほしい時、ペンを貸してほしい時、具合が悪そうな時など、その場面に応じた表現を使って生徒との受け答えを行った。

検証1

毎回言い続けることで、英語を使うことに抵抗はなくなっている。あいさつ、プリント配布、くしゃみについては、無意識に受け答えができていた。ワークブック作業時のやりとりについては今年度になってやり始めた。時々ではあるが、すんなり発話できるようになっている。

仮説2

身近なことに関するQ&Aをくり返し練習すれば、受け答えができるようになるのではないか。

実践2

授業の導入で「Warm-up Q&A」というプリントを用いて、毎時ペアを変え、10分ほどQ&Aを行った。質問をする人と答える人の役割を5分交代とした。全11問で、最初の5問は、日付や天気、時刻など機械的に答えられる質問で、次の5問は自分のことについて答える質問とした。ペアによって全問を終える時間が異なるので、最後の1問はFree questionとし、自由に質問し合うこととした。

検証2

機械的に答えられる最初の5問に対しては、約3割の生徒がこの活動を始めてから何も見ずに答えられるようになっており、活動以前から答えられる生徒と合わせると、約7割の生徒は自然と受け答えができるようになっている。また自分のことについて答える質問については、約6割の生徒が用紙を見ながらであれば答えられるようになった。

仮説3

身近なことに関するQ&Aが単発で終わらないように、少しずつ話す文を増やしていけば会話が続くのではないか。

実践3

実践2で使ったプリントを少し変え、同じように授業の導入で約10分間行った。全11問。最初の4問は実践2で使ったものと同じで、機械的に答えられる質問、次の6問は自分のことについて答える質問で、そのうち4問は答える時に詳しい情報をさらに付け加えられるような質問とした。最後の質問は実践2と同様、Free questionとした。

検証3

まだ十分な回数を行っておらず、正確な検証には至っていない。現時点では、数名の生徒が質問に対して2文程度の情報を付け加えて答えることができているが、ほとんどの生徒がまだ詳しい情報を付け加えて答えることができていない。

研究の成果

「続けること」が大事であると改めて感じた。続けていくことで英語でのやりとり抵抗を感じることなく、自然に受け答えができるようになっていったと思う。また今回の活動をしたことで、たとえ文法的に間違っていようと、自分の言いたいことを何とか英語にしてみようと挑戦する生徒の姿も見られた。さらに普段は授業参加に消極的な生徒も、Q&Aの時間は楽しそうに活動ができており、その生徒の意外な一面を見ることができたのは大きな収穫であった。今後もぜひこのような活動を継続して取り入れていきたい。

今後の授業改善の課題

ほとんどの生徒が、間違いを気にせず話そうとしているので、その気持ちを大切にしたい。さらに「正確さ」をどのように身につけていくかが課題である。また今回の実践では、1つの質問に対して少し長めに答えられるような手立ては考えたが、「会話を続ける」ための手立てとはなっていないので、その手立てを考えていく必要がある。

リサーチについての問合せ先:

職場電話 0887-24-4100

電子メール

sakihamaj@kochinet.ed.jp